

## 分子標的薬について No. 2

### はじめに

分子標的薬とは、前号でもお伝えしましたように、がんの増殖や転移に関わる分子を標的として作用するお薬で、従来の抗がん剤に比べて正常細胞への影響が少ないのが特徴です。

今回は、現在当センターでも使用されている分子標的薬をいくつかご紹介します。

### ★ イレッサ（ゲフィチニブ）

使用する疾患；肺がん

イレッサは、肺がん細胞の表面にある EGFR と呼ばれるタンパク質を標的として作用します。EGFR は、がん細胞が増殖するのに必要な信号を伝える働きをしているため、イレッサが作用することにより信号が伝わらなくなり、がん細胞の増殖が抑えられます。

使用方法は・・・？

のみぐすりです。1日1回1錠を服用します。

起こりやすい副作用は・・・？

発疹・かゆみ・皮膚乾燥・下痢・食欲不振・体がだるい等の症状が現れることがあります。

### ★ ハーセプチン（トラスツズマブ）

使用する疾患；乳がん・胃がん

ハーセプチンは、がん細胞の表面にある HER2 タンパクを標的として作用します。HER2 タンパクは、がん細胞が増殖するのに必要な物質を取り込む働きをしているため、ハーセプチンが作用することにより、がん細胞はそれ以上増殖することができなくなります。

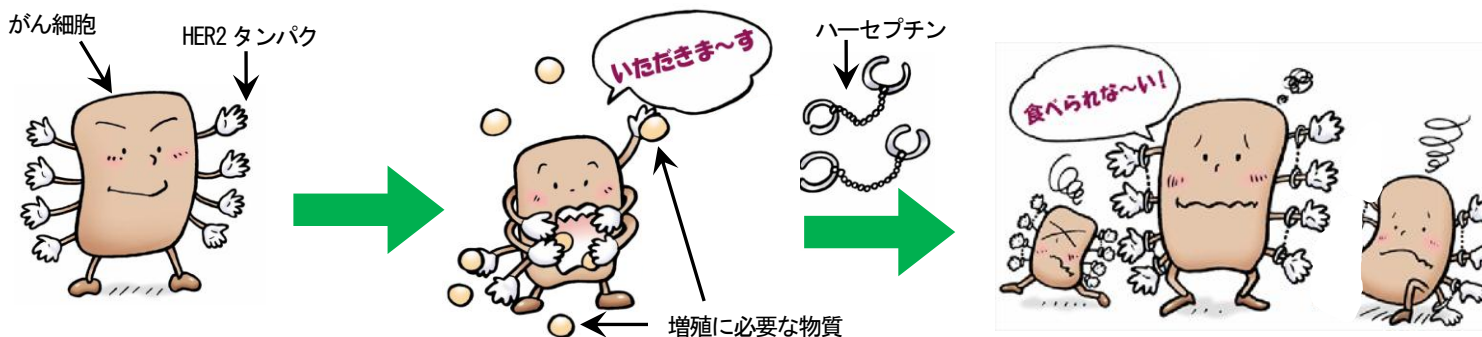
使用方法は・・・？

1～2週間に1回、60～90分かけて点滴しま

起こりやすい副作用は・・・？

発熱・悪寒・吐き気・頭痛等が起こることがあります。ただし、これらの副作用は出たとしても初回のみで、2回目以降はなくなるのがほとんどです。

※ハーセプチンは、がん細胞を調べて、HER2 タンパクの量が多い方にのみ使用します。



## ★ グリベック（イマチニブ）

使用する疾患；白血病・消化管間質腫瘍

グリベックは、疾患の原因となる異常なタンパク質を標的として作用します。

このタンパク質は、白血病細胞もしくは腫瘍細胞の増殖を促す働きをしているため、グリベックが作用することにより、これらの細胞の増殖が抑えられます。

使用方法は・・・？

のみぐすりです。1日1回4～6錠を服用します。

起こりやすい副作用は・・・？

発疹・かゆみ・吐き気・下痢・むくみ・筋肉痛・発熱等の症状が現れることがあります。

## ★ リツキサン（リツキシマブ）

使用する疾患；悪性リンパ腫

悪性リンパ腫とは、白血球の一種であるリンパ球ががん化する病気で、がん化した細胞の種類により多くのタイプに分けられます。

リツキサンは、リンパ球の表面にあるCD20と呼ばれるタンパク質を標的として作用します。

リツキサンがCD20をもつリンパ球に作用することにより、体の免疫機構（もともと体に備わっている、体に不要なものを排除するしくみ）が働いて、リンパ球は攻撃を受けます。

使用方法は・・・？

1週間に1回、4～8時間かけて点滴します。  
多くの場合、2回目以降は時間が少し短くなります。

起こりやすい副作用は・・・？

発熱・悪寒・吐き気・頭痛・かゆみ・発疹等が起こることがあります。副作用の多くは初回治療中に起こり、点滴終了後、もしくは遅くとも翌日にはほとんど症状はなくなります。

副作用が起こるのを予防するために、点滴30分前にお薬を服用します。

※ リツキサンは、血液検査や組織検査等を行い、Bリンパ球ががん化していて、その細胞表面にCD20をもつ方にのみ使用します。



この他にも、様々な新しい分子標的薬の開発が進められています。

